

令和7年度 奈良市立月ヶ瀬こども園 研究実践概要

園長名 西久保 和子
全園児数 20名

1. 研究主題

自ら心と体を動かし、共に育ち合う子どもをめざして
～小規模園の特色を活かした環境づくり～

2. 研究年度

初年度

3. 研究主題設定理由

昨年度までの取り組みを通して、環境について職員間で話し合い共に考えていくことの大切さを改めて感じた。一方で、少人数ゆえに1つの遊びに他学年が集まって遊ぶ姿も見られ、園庭の遊びの場を乳児と幼児で区切っているものの、異年齢児間での交流もでてきている。互いの保育内容も理解して保育を進めていけるように、さらに乳児と幼児の保育者間で連携を図っていくという課題も出てきた。そこで、職員間で話し合い、今年度は共に育ち合う子どもの育成をめざして、より小規模園の特色を活かした環境づくりができるように研究主題を設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

- ・小規模園の特色を活かした環境づくりを行い、心と体を動かし自ら意欲的に遊びながら、異年齢児と共に育ち合える子どもを育成する。

②研究の重点

- ・自ら心と体を動かしたくなるような発達に応じた環境づくりを工夫していく。
- ・定期的に職員間で遊びの環境について話し合い、各学年のねらいを共有したり、環境の見直しを行ったりし、改善を図っていく。
- ・乳児の保育者と幼児の保育者で話し合う機会を意識的にもつようにし、連携を深める。

③活動の方法

自ら心と体を動かしている子どもの姿 環境づくり

【0歳児】「ばぁー」1月

0・1歳児が同じ部屋で過ごしているので、1歳児が外遊びをしている間に0歳児だけでゆったりと遊べるように遊びの保障を室内で行う日もある。保育者が牛乳パックでつくった台や四角の枠を遊べるように用意していると何してるのかなという表情をして興味を示し、保育者の側にやってきた。A児(1歳6ヵ月)が台の上を歩き始めると、その様子を見ていたB児(1歳2ヵ月)も同じように台の上を歩こうとした。2人の様子を見て「上手に歩けるようになったね」と声をかけ、落ちたり転んだりしないように側で見守るようにした。A児もB児も最初は保育者と手を繋いでいたが、ゆっくりと一人で歩くようになった。また、保育者が四角の枠を立ててトンネルにすると、くぐって遊んでいた。トンネルをくぐっている友達の様子に行き、顔を見て「ばぁー」と喜んで笑い合う姿が見られた。



<反省・評価>

0歳児だけで室内で遊ぶ日をつくったことで、保育者との安心した関係のもとでゆったりと落ち着いて遊ぶ姿が見られるようになった。日頃から子どもがしている遊びを側で見守ったり一緒に遊んだりする中で楽しい思いを言葉や表情、しぐさで共感し伝えていくことを大切にしている。いつも一緒に過ごす友達に関心をもち、友達と関わって楽しいと感じられるように子どもの思いを大切に子ども同士を繋げていく援助を心がけていきたい。

【1歳児】「あるこう あるこう」10月

外遊びをしていると2歳児のしていることを真似て、「よいしょ」と六角形の台を押ししたり転がしたりしながら台を並べ始めるA児。その様子を見ていたB児C児も同じように真似しようと始めた。「先生も一緒にしていいかな？」と子ども達に声をかけるとB児が「いいよ」と答えた。保育者も一緒に運びながら何回も取りに行き、長く並べ終えたとき子ども達はとても満足そうだった。台の上を歩いたり最後はぴょんと跳んだり楽しむことを子どもに見せると、保育者の遊ぶ様子を見て同じように歩いたり跳んだりすることを楽しんでた。子ども達に「やった一跳べたね」と声をかけると嬉しそうな表情をして“もう一回”と繰り返し遊んでいた。



<反省・評価>

『やりたい』という子どもの気持ちを受け止め、見守ったり一緒に遊んだりできた喜びに共感することを大切にしている。子ども達で何回も運び、長く並べて歩いたり跳んだりしてきた喜びに共感したことで、もう一回したいという気持ちに繋がった

【2歳児】「よし、チャレンジだ！」9月

体を動かして遊ぶことに意欲的な子ども達の姿から、園庭の乳児エリアに新たに、タイヤ遊具を設置した。設置後すぐ、2連に並ぶタイヤの間を駆け抜け完成を喜んでた子ども達。まずは「こんなこともできるよ」と保育者がタイヤに両手を置き全身を支えながら、足を浮かせる、地面に着地するを交互に前進しながらタイヤの間を通りぬけてみた。子ども達はすぐ、「よし、チャレンジだ！」と真似て遊びだした。他にも、タイヤ(1列)に跨って前進し渡ったり、タイヤ(2連)の上に足をかけて乗り、「せんせー、もって！」と保育者に手を支えてもらおうと、バランスをとりながら立ち上がり、両手を広げポーズをとったり、ジャンプで跳び降りたりなど、いろいろな遊び方を一緒に楽しんでいった。次第に自分一人でタイヤの上に足をかけて乗り立ち上がれるようになると、そこから両手をつき前傾姿勢になり、手足を交互に動かしタイヤ渡りを繰り返し楽しむ姿が見られるようになった。タイヤ遊具での遊びは、年下児と一緒にタイヤ山登りをしたり、友達を乗せてのタイヤ引き、転がして追いかけたり、タイヤにうつ伏せに乗り体を前後に揺らしたりなど、全身をしっかりと使いながら様々な遊び方でそれぞれが楽しめる遊びとなっている。



<反省・評価>

様々な形、遊び方の展開ができるタイヤ遊具を取り入れ、子ども達にどんな遊び方ができるのかを保育者が遊んで見せ、提案することで、“やってみたい！”という気持ちを引き出す環境となった。保育者が側で見守りながら、応援したり援助したりすることで、子ども達は安心して何度も挑戦することを楽しみ、満足感を味わうことにつながった。繰り返し遊ぶ中で、全身を使う動きを自然に引き出し、バランス感覚や体幹の育ち、運動能力の向上につながっていると考えられる。

【3歳児】「チンするやつほしい」 10月

戸外で、秋の自然物や野菜の皮、砂や水などを使ってイメージするケーキや色水、ごちそうづくりをしていたA児。事前に用意したナイフやまな板、すりこ木など、様々な道具を使う異年齢児の姿にも興味をもち、同じように試してみながら楽しんでいた。A児「先生、チンするやつほしい」と保育者に知らせると、保育者「うん、いいよ。何をオープンにする？これ使う？」と、オープンに使えるようなビールケースなどを提案したが、A児は保育者の返事を聞き、一目散に保育室へ戻り、室内のままごとコーナーで使っている手づくりのオープンを持って戸外に戻ってきた。そのオープンをうれしそうにテーブルに置くと、砂や自然物でつくったケーキを焼いたり「あたためるねん」と色水をオープンの中に入れてたりして、料理の続きを楽しんでいた。そこへ、B児（4歳児）「これもチンしたい、入れてもいい？」とA児のところに来ると、A児「ちょっと待ってて。ケーキまだ焼いてるから。このボタン押すねんで」と、オープンの使い方などを伝えながら友達との関わりが広がっていった。



<反省・評価>

ごちそうづくりからごっこ遊びへと発展したりイメージを広げて遊んだりできるように、身近な自然物や家庭にある調理器具などを豊富に用意し、環境を整えていった。また2学期の始め頃、室内でもままごと遊びが盛んな中、子ども達からの「オープンがほしい」という思いを受け止め、子ども達と一緒にオープンをつくったことで、戸外での遊びと室内での遊びがつながり、遊びが盛り上がっていった。遊びに必要な材料や道具を自分で考えたり真似たりして、自分なりに試したり工夫したりするなど思考力も育ってきている。他にも、同じ遊びを通して同年代や異年齢の友達との関わりも広がり、意欲的に遊ぼうとする姿が増えてきている。

【4歳児】「つぎは何する？」10月

運動会后、保育者がリズム表現で使った曲を流すと、「わー」と一斉に子ども達が集まり「やりたいやりたい」と運動会ごっこが始まった。A児がB児（3歳児）の手を引き「ここに立っててね。旗、取ってくるね。何色がいい？」と聞くと、B児は「黄色！」と応えた。そして曲が流れてくると、A児はB児に「今はこうやで」と振りをして見せたり、「そうそう、上手！」「1、2、3、4、5、6、旗を上げる！」とカウントを取ったりした。途中、隊形移動の部分になり、A児がB児の背中を優しく押して「ここまで歩いてくるよ」伝えると、B児は「うん！ほしぐみさん（4歳児）、ここまで歩いてたなあ」と応えた。1曲が終わると、「次は何する？」と子ども達は顔を見合わせ「次はパーランクーしよう」「小太鼓はそらぐみさん（5歳児）だけできるねんで」「はなぐみさんのポンポンしてみたい」と、思いを出し合っていた。そしてC児（5歳児）が指揮のために前に立つと、A児は「C君のピッの合図で動いてな」と張り切って伝え、繰り返して遊んだ。



<反省・評価>

運動会という大きな行事を経験したことでやり遂げた充実感を感じ、自分達で遊びを考え楽しんで欲しいという思いで、楽器やフラッグを目につくところに置いたり、曲を流したりした。小規模園ということもあり普段から異年齢の友達と関わって遊ぶことが多く、一緒に様々な経験をしてきたことで親しみを感じ、思いやりや憧れの気持ちをもって関わるようになっていった。また、友達に自分の思いを伝えたり、相手の思いや気持ちを受け入れたりして遊ぶことで一体感を感じ、自分達で遊びを進めようとする姿に繋がったと考えられる。

【5歳児】「どうやったら本物みたいになるかなあ」10月

砂場でA児が「大きな山つくろう！」と始めると、B児（4歳児）も「一緒にしていい？」とシャベルで砂をかけたりコテで固めたりし、山はみるみる大きくなった。そこに、C児、D児がやってきて、「すごい山やーめっちゃ大きいな」と見ている。A児は「これは富士山やねん」と応えた。『富士山』というWordにC児が目を輝かせ、「富士山知ってる知ってる。じゃあ本物みたいにつくろうよ！」と遊びに加わった。その様子を見ていたD児が「どうやったら本物みたいになるかなあ」と言葉にすると、A児が「富士山の上は白くなってるねん。サラ砂かけたらいい」と応え、C児は「そうそう！それでな富士山の周りには道と池があるんやで。それもつくったら本物みたいになるんちがう？」と伝え、D児は、「池を本物みたいに作るなら水を流したらいいと思う！」と言って、道と池をつくり始めた。保育者が「その池は湖っていうんだよ。じゃあ、必要なものは？」と問うと声を合わせて「ホース！」と答え、D児は真っ先にホースを引きに向かった。水が溜まり始め、異年齢児が「入れてー」と集まると、C児が「いいよ！これは、富士山と湖やでー」と伝え、砂場遊びが広がっていった。



<反省・評価>

個々にしたいことを見つけて遊ぶことが多い年長児であったが、この日、友達がつくった砂山がC児の知っている『富士山』と繋がったことで興味を持ち、友達と気付いたことや考えを出し合う姿が見られた。また、『本物みたいに』という共通の目的をもって遊びを進めていく面白さを感じ、友達と協力してできたことに自信と満足感をもつことができた。幼児クラスの砂場が一つということもあり、年長児の遊びが異年齢児の刺激となって「やってみたい」という思いが高まり、5歳児を中心に幼児クラス皆で遊びを展開する姿に繋がったと考えられる。

5. 研究の成果

乳児組は、月齢や個々の発達を把握し、信頼できる保育者からの温かなまなざしや応答的な関わりを大切にしてきたことで、安心して遊ぶ姿に繋がった。また、体を動かし、「楽しいな」「もっとやってみたい」と繰り返し遊ぶ環境づくりに取り組み、しなやかな体づくりができたと考える。

幼児組は、戸外での遊びの場を異年齢で共有する中で、子ども一人一人の姿を把握し、常に保育者間で話し合い、遊びの内容に応じて、ものやことなど環境構成を行った。時には、学年での遊びの場の保障と援助の工夫をしてきた。そのことで、興味も広がり、互いに刺激し合いながら、初めての遊びや経験に取り組んだり、諦めずに繰り返したりする姿に繋がった。

そして、乳児クラスと幼児クラスで園庭の使い方について、時間帯や遊びの場、遊具の利用方法などを話し合ってきたことで、安全を確保しながら、それぞれに満足して遊ぶ姿に繋がった。常に、保育者間で共通理解していくことの重要性を感じる。

6. 今後の課題

今後も、安心できる環境のもとで、各年齢で発達段階に応じた子どもの育ちを共通理解し、保育内容について意見を出し合い、学び合うことを積み重ね、保育の充実を図っていききたい。そして、小規模園であるからこそ、乳児期には安全にも配慮した環境づくり、幼児期には異年齢の中で互いに認め合える環境づくりや関わり、援助に努め、子ども達が自ら心と体を動かし、主体的に活動できるようにしていきたい。